

重職心得箇条

経営者あるいはリーダーには人間力、先見力、決断力、実行力が必要と言われる。ところが、そのような能力を生得的に持つものは稀であり、多くは自ら学び、経験するなかでしか会得する道はないようだ。

10年前ごろ、私は住友生命の役員からミ二冊子の「重職心得箇条」を頂戴した。その添書きには、「本書は、当社の昭和時代に使用された教材で、当時の新井社長から管理職に昇格する際、管理職の心構えを指導され、その時渡された。小泉首相(当時)が、田中真紀子外相にコピーを渡して論じたことで話題になったのもこの冊子」とある。口語訳を含めわずか26ページ足らずの冊子である。ところが簡潔にして核心を鋭く突く内容は、今にあっても全く古さを覚え、読む人の心を捉える。

著者の佐藤一斎は江戸後期の儒学者、教育者として著名で、言志四録を著したことも知られる。私の頭取の時期は、リーマンショックや東日本大震災などにみまわれ、平時とは違った対応が求められた時期でもあった。そのような時、自分自身の内なる拠り所となったのがこの冊子である。

「重職心得箇条」は17条からなる。そこには、部下の用い方、人間関係、変えるべきことと守るべきこと、重職としてとるべき態度、仕事の優先順位の決め方、心の強さ、大局観を持つことなど、経営者にとってのアドバイスに溢れている。これらをも人間力、先見力、決断力、実行力という視点で捉え直す事もできる。奥が深いのである。

まず人間力である。一斎は、「自分の案に比べ部下の案がそれほど劣らなければその案を採用するのがよい」、「嫌いな人間もよく使いこなすことが腕前」と説いている。私の最も好きな部分である。部下がやる気を起こし、成長する機会につなげる配慮でもある。自分の周りにいる人間を大切にす、思いやるのが優れた経営者の条件ということであろう。

次に、先見力では着眼を高く持つて全体を見回し5年、10年のうちにどう進めるかの成算を立て実行するとある。言い換えるなら常に問題意識を持ち、現状分析と目標設定を怠らないことの大切さを示している。

決断力では、まず、自分の案をしっかりと

持ったうえで、先例を参考にしながら判断するのが肝要で、自案を持たずに先例に頼るのは多くの人間がかかる病と鋭く指摘している。

最後に実行力である。一斎は「多忙を口にするようでは、心の余裕がなくなり大事なことに気が付かず、手拔かりが生じる」という。だからこそ、どう実行していくかきちんと段取りを考え、任せるものは任せる。これができれば仕事の8割がたは終わったものといえる。

「重職心得箇条」は、その後の人生の指針となった一冊である。そこで、もつと多くのにも役立ててもらいたい思いから、「いわぎん次世代経営塾」の卒業者と銀行の新支店長に短い激励のメッセージを添えて一人一人に手渡すことを6年前から始めた。17条には、トップに就いて初めて経営を担うときというのは、1年に春という季節があるようなもので、まず、心を一新して、元気で愉快な心を満たすようにやっていきたいものだとある。1年の始まりにあたり、このことをかみしめながら、新たな年の扉を開いていきたいと思う。



一般財団法人岩手経済研究所
理事長
(岩手銀行 会長)

高橋 真裕